
愉快的仲間達

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愉快的仲間達

【Nコード】

N7575U

【作者名】

RAN

【あらすじ】

DQ3の1stパーティー。

男勇者と女賢者+二人の旅にいつもちよっかいをかけてくる男勇者
大好きな女武闘家。

女賢者はいつももやもやした気持ちを抱えていた。

いつからだったかは忘れた。

武闘家の女の子、確か名前はカリンという子が、クレイにちょっかいかけるようになった。

「クレイさん！ あたしと一緒に連れてってください！ 二人だけじゃ心許ないですよ！」

今日もまた、カリンがクレイに自分を仲間にするように言った。

その声は大きく、よく響くから周りの人は好奇の目で見てくる。はつきり言って、恥ずかしい。

クレイもクレイだ。

いつもにこにこしてるけど、こんな時も笑顔でいるんだから。

カリンという子も、だからあきらめないで来ているのだろう。だが、彼の答えはいつも同じだった。

「ごめん。旅には彼女以外連れてくつもりはないんだ」

彼はわかっているのだろうか。

笑顔でそんな風に言われることが、どれだけ彼女を傷つけるかを。そしてカリンはまたいつもと同じように、少し悲しげな笑顔を浮かべた。

「そうですか……。でも、私あきらめませんから！」

カリンは最後はまた来た時と同じ力強い顔で、一時退却とばかりに言い残して立ち去っていった。

私は、彼女が去つたのを確認すると、クレイを睨みつけた。

「もっとちゃんと云つた方がいいわよ」

すると、クレイはより一層笑みを濃くした。

「やきもち焼いてくれてるの？」

「違つてば！」

私は思わず椅子から立ち上がり、大きな声で否定してしまった。そのせいで、また周りの人には見られるし、クレイの思うツボでもあるのに。

「相変わらず仲がよろしいですね」

私が笑顔のクレイを睨んでいると、後ろから声をかけられた。

途端にクレイの目が冷え、笑顔もどこか鋭い表情となった。

私はそれで声の主が誰かわかり、振り返った。

「シエルさん、ラクスさん」

振り返ると、青い肩を少し越すほどの髪の賢者シエルさんと、大きな黒いとんがり帽子が印象的な魔法使いのラクスさんがいた。

「こんにちは」

シエルさんは笑顔で、ラクスさんはやや苦みを含んだ笑顔でいた。

「これはシエルさん、ラクスさん、最近よくお会いになりますね」

クレイは椅子から立ち上がって、二人に近づいた。

その顔に笑顔は浮かべているが、その鋭い視線は、特にシエルさんに向けられていた。

クレイはなぜかシエルさんに対して、あまり良い感情を抱いてい

ないようだ。

「ええ、偶然ですね」

シエルさんもそのクレイに応えるものだから困ったものだ。

私は二人が出す痛い空気に、ラクスさんに視線を向けた。

ラクスさんは、しょうがないなとため息を吐き、二人の間に割って入る。

「今日はたまたまこの町に用事があったんです。クレイさんが気になさるようなことはありませんから」

「僕は何も気にしてませんよ。ただ、最近よくお会いすると思うだけです」

私は見ていてハラハラした。

そういえばラクスさんは、しっかりしててそうに見えて、意外とドジなところがある。

いつも何とかしてもらっているが、彼女に二人の收拾をつけることは大変な作業かもしれない。

私は見ていられなくなり、ラクスさんと同じように三人に近づいた。

「クレイ、そろそろ出なくていいの？」

私達はまだこの町に着いたばかりだった。

情報収集と予約のために宿屋に来て、今に至るのだ。

まだ町の様子もわからないので、少しでも外に出てみたいところだった。

クレイもそれを思い出したようで、私に笑顔を向けた。その笑顔はいつも見る笑顔だった。

「そうだね。そろそろ出ないと暗くなってしまうね」

「そうですか、これはお邪魔してすみませんでした。それではラク

スさん、私達も失礼しましょうか」

シエルさんは、隣にいるルクスさんに、こちらは変わらない笑顔で言った。

「ああ、そうだ。忘れるところでした。リリースさん少しよろしいですか？」

「はい？」

シエルさんは私に手招きをしたので、私はシエルさんに近づいた。

「これを」

私が近寄ると、シエルさんは小さな一つ折られた紙切れを私に差し出した。

「何ですか？」

私はそれを受け取り、中は開かずにシエルさんに尋ねた。

すると、シエルさんは私の背中に手を回し、着ているマントで私を覆うようにすると、そっと耳元に囁きかけてきた。

「……………！」

私はその内容を聞くと、驚いて思わずシエルさんの方を勢いよく振り返ってしまった。

シエルさんはすでに私から離れていて、笑顔で私を見ていた。

「どうするかは貴方次第です。それでは、これで。ルクスさん行きましょうか」

シエルさんはルクスさんをそっと押して、宿屋の部屋がある奥へと去った。

私は少しの間、ただぼーっとシエルさん達が去った方を見ていた。クレイの不機嫌そうな声が聞こえるまでは。

「それじゃあ、僕達も行こう」

そう言つと、クレイは私の手を強く引いた。
私はそこで気づき、慌ててクレイについていった。

クレイと共に町を回っている時も、私はシエルさんに渡されたものが気になっていた。

渡されたものとは、ダーマの神殿という場所の奥にある塔に、賢者への道を開く「悟りの書」があるという情報だ。

カリンの言われたことは、私だつて気にしていた。

僧侶のままで、どこまでクレイの力になれるのか。

賢者になれば、僧侶の回復魔法を使え、さらに賢者が覚える攻撃魔法なども使えるようになり、魔法の力も強力なものになる。

そうなれば、クレイの力になれるのではないのだろうか。

何の不安も抱かずに、彼の隣に立っていられるのではないだろうか。

そう思ったから、私は賢者になることを考えていた。

賢者のことは、シエルさんにも勧められていた。

そして私は、これで賢者になる決心を固めることができた。

RAN * * * 2006 / 9 / 4 * * *

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7575u/>

愉快的仲間達

2011年7月11日13時40分発行